

## 受難節第4主日礼拝説教「天からの声を聞く」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年3月30日

### 【旧約聖書日課】出エジプト記 24章3～11節

<sup>3</sup>モーセは戻って、主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせると、民は皆、声の一つにして答え、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と言った。<sup>4</sup>モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。<sup>5</sup>彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。<sup>6</sup>モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半分を祭壇に振りかけると、<sup>7</sup>契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、<sup>8</sup>モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」<sup>9</sup>モーセはアロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老と一緒に登って行った。<sup>10</sup>彼らがイスラエルの神を見ると、その御足の下にはサファイアの敷石のような物があり、それはまさに大空のように澄んでいた。<sup>11</sup>神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかったので、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ。

### 【使徒書日課】ペトロの手紙二 1章16～19節

<sup>16</sup>わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。<sup>17</sup>荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があつて、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。<sup>18</sup>わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。<sup>19</sup>こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。

### 【福音書日課】マタイによる福音書 17章1～13節

<sup>1</sup>六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。<sup>2</sup>イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。<sup>3</sup>見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。<sup>4</sup>ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエ

リヤのためです。」<sup>5</sup>ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。<sup>6</sup>弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。<sup>7</sup>イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」<sup>8</sup>彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。

<sup>9</sup>一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。<sup>10</sup>彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。<sup>11</sup>イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。<sup>12</sup>言うておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」<sup>13</sup>そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

### 「ここにいるのは、すばらしいこと」【こども説教のために】

日曜日の教会に呼び集められて来た皆さん。ここで主イエスにお会いしたいと願ってこられた皆さん。主イエスは、日曜日の教会にだけいらっしゃるではありません。教会の外にも、日曜日以外の六日間の間も、わたしたちの毎日の生活の中で、共に歩んでくださっているのです。そこでは、もしかするとご自分のことを目立たせられずに、わたしたちが自分で考えた通りに歩めるようにしてくださっているかもしれません。そのわたしたちが、日曜日の教会に導かれて来ることができたのは、この日だけは主イエスがわたしたち皆を教会へとお連れくださっているからなのです。

主イエスは、弟子たちの三人、ペトロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に登られたことがありました。そこで見た景色は、すばらしいものでした。ペトロが思わず、「**ここにいるのは、すばらしいことです**」と口にしたほどです。けれども、ペトロが見た景色は、山の上から見る眺めや雄大な自然だけではありません。それよりもはるかにすばらしい景色を、ペトロは見たのです。それは、主イエスの輝く姿です。**顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなっていました。**そして、旧約の預言者、モーセとエリヤが現れ、主イエスと語り合っていました。その光の輝きは、ペトロたちのことも包み込んでしまうほどでした。それは、「神の子」と呼ばれる者たちの光り輝く景色だったのです。

主イエスがお連れくださった教会で、わたしたちは皆、「神の子」と呼ばれるようになります。ここで、主イエスの光り輝くお姿を見るからです。そうです、わたしたちが**ここにいるのは、すばらしいこと**なのです。

## 「これはわたしの愛する子」

「受難節（レント）」の40日と6回の日曜日を通して、教会は、主イエスがわたしたちをどこにお連れくださるのか、思い起そうとしています。日曜日を除く週の六日、わたしたちは、主イエスのことなど思い出しもせずに過ごしているかもしれません。それでも、日曜日の教会には来ることができているからと安心していたりするのです。そのようなわたしたちのために、教会の先達は、日曜日を除く40日間の「受難節」を設けてきました。主イエスがわたしたちをどこにお連れくださるのか、日曜日の教会だけでなく、日々の生活の中でも思い起こすためです。

「受難節」を通して、主イエスは、わたしたちを、受難週の「十字架」の出来事へとお連れくださるでしょう。そして、その先、「ご復活」の出来事へとお連れくださるでしょう。主イエスは、**人々から多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活**（マタイ 16:21）なさるのです。その道行きに、主イエスは弟子たちを伴われました。ご自分の行かれた道に後からついてくようにと呼びかけられ、弟子たちをお連れくださったのです。弟子たちをお連れくださった主イエスが、わたしたちのことをもお連れくださるのです。

青年時代、母教会でこの期節に「受難劇」に参加したことがあります。教会学校の行事ではなく、教会全体の行事として、先輩方が企画したものでした。わたしの記憶では毎年しているような企画ではなかったのですが、子育て世代の先輩たちが中心になって、さまざまな世代に声を掛けて行われました。恒例ではありませんから、衣装や舞台道具が揃っているわけではありません。役者は、代用品の衣装か、役柄によっては衣装無しで普段着で演じました。「受難劇」を見たことがない者がほとんどでしたので、企画した人たちも役者たちも、手探りで準備を進めました。教会の皆さんもどのようなものになるのか想像がつかなかったのでしょうか、役者に手を挙げる者が足りなかったようで、わたしにまで声が掛かったのです。本人の記憶にも残らない端役をいただいて、参加しました。今さらながら、もっと積極的に関わっておけばよかったと思います。企画をしてくださった子育て真っ最中の先輩たちは、きっと、「受難劇」で描かれる「十字架とご復活」の出来事を、子どもたちの心にしっかりと焼き付けてやりたいと願っていたのだと思うのです。

主イエスの公生涯の歩みは、ヨルダン川の谷底で洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられるところから始まりました。そのとき、天から「これはわたしの愛する子」（マタイ 3:17）という声が響いたのです。その同じ声の響きを、弟子たちは、高い山の上で聞きました。それは、主イエスを指して告げられただけの声ではなかったのかもしれませんが。そこにいた者たち皆が、その声を聞かされたのです、「ここに居るのは、わたしの愛する子」と。

## 「起きなさい」

教会は、主イエスにお連れいただいたところで、その声の響きを繰り返し聞き直しています。「これはわたしの愛する子」。主イエスは、わたしたち皆が、この天からの声の響きの中に置かれるようにと、一つのところにお連れくださろうとしているのです。

教会では、ご復活の祝いに向けて、洗礼に備えている人が与えられています。その後の聖霊降臨の祝い为目标に定めている人もあります。洗礼は、わたしたちがキリストに結ばれた者として新しく生まれるしるし、恵みのしるしです。人としての誕生日がいつでも良いように、キリスト者として生まれる洗礼の日は、いつであっても祝福されるものです。それでも、なお、教会は、洗礼の恵みにあずかる者を、ご復活の出来事へとお連れしようとするでしょう。いつ洗礼をお受けになるとしても、わたしたちは皆、ご復活の出来事の中で、洗礼へと導かれ、新しい命の歩みを始めるのです。

主イエスが弟子たちに「洗礼」をお命じになられたのは、死んでご復活なさってからでした。ご復活の主は、弟子たちを山の上にお集めになられて、指示されました。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」(マタイ 28:19~20)。

そうです。主イエスも、ヨルダン川の谷で洗礼者ヨハネによって洗礼をお受けになられることから、公生涯の歩みを始められました。「神の子」としての生涯です。「これはわたしの愛する子」との声の響きを聞き、「神の子」と宣言されて生きる者の生涯です。

その声の響きを聞くようにと、弟子たちは、高い山に連れて来られました。光り輝く主イエスのお姿は、まさに神の御子のものでした。けれども、その光の輝く中に、弟子たちも包み込まれたのです。あの天からの声を、弟子たちも聞く者となったのです。「これはわたしの愛する子」との声の響きを聞かされて、彼らもまた、「神の子」と宣言される者となったのです。そこで彼らは、言われました、「起きなさい」と。「復活しなさい」という意味です。

主イエスは、弟子たちを起き上がらせ、復活させられるでしょう。ご復活の主は、彼らを山の上に呼び集められたのです(マタイ 28:16~20)。そこで、洗礼を執り行うようにされました。洗礼のしるしをもって、「神の子」と宣言される者の教会となりました。

それが、わたしたちの招かれてきた教会です。「これはわたしの愛する子」という天からの声の響きを繰り返し聞く教会です。ここにいるだれもが「神の子」と呼ばれる価値のある者であることを知るところです。

そうです、「ここにいるのは、素晴らしいことです」。